

ブルキナファソを旅して④ ～貧困をどうみるか？～

コロナ禍で改めて明らかになったことは、日本の政治、メディアにおける科学知識の貧困さでした。言い換えれば、感情に対するアカデミズムの弱さです。今、私たちが最優先すべきは、すべての人の安全と健康、命の大切さです。感情によって、正しい知識が隠蔽され、不安だけが煽られてはいないでしょうか？

アフリカ地域のことで言えば、今 20 年ぐらい前には地球環境を悪化させている原因として「焼き畑」があげられ、高校「地理」教科書でも掲載されていました。焼き畑という農業方法は、アフリカに限らず南アメリカ、アジア地域でも、もちろん日本でも広く行われていた伝統的な農業です*。「焼き畑農業」のことを。英語の専門用語では「swidden」と言いますが、これは土地に生えている草木を焼くことで肥料にし、地表近くの微生物や昆虫などを死滅させて土地をきれいにする農業のことで「slash-and-burn farming」とも言います。現在アフリカでは、食用とされる穀類、イモ類はほとんどこの焼畑農業によって栽培されています。

樹木を燃やすことで大量の二酸化炭素が発生、地球温暖化に拍車をかけていると言われ、「悪者」にされてきました。確かに焼き畑により二酸化炭素は発生しますが、その後の継続する農業でできる農作物は二酸化炭素を吸収するため、一般的に言われるほど二酸化炭素の量は多くないと考えられています。むしろ化石燃料を燃やして使う自動車の方が、二酸化炭素量が多いと言えます。また、ブルキナファソをはじめとした亜熱帯地域では、二酸化炭素の吸収が高いモリンガという木*があり、貢献しています。

さらには、西アフリカでは古代から続く伝統的な農法に「ザイ Zai」と呼ばれるものがあります。半乾燥地域の農地に直径 30cm 程度の浅い穴を掘って、草木を入れるだけの農法です。乾季が終わる頃には、ここに雨水がたまり、植物が腐敗して養分になります。ここにアリ塚をつくるシロアリが集まり、地面を柔らかくして豊かにしてくれるのです。ここに苗を植えることで、化学肥料に頼らずとも樹木が育つようになります。

皆さんの中には『木を植えた男』という絵本(DVD)を知っている人もいます。これはフランスの作家ジャン＝ジオノさんが 1953 年に著した短編小説ですが、ブルキナファソにも「木を植えた男」がいるのです。ヤコウバ＝ザワドコ Yacouba Sawadogo さんもその一人。古代農法のザイをよみがえらせ、お金もかけずに森林を復活させた人です。ブルキナファソでは、長年の過剰農業と過剰放牧、人口爆発による土壌侵食で乾いた土地となっていました。植物が育たず、農業や畜産を行えなかったために人々は都市へ次々に出稼ぎに行き、農地はすっかり荒れ果てていました。国内外の研究機関が土壌改善を試みましたが、結果を出すことができませんでした。この状況を 40 年も前からザイ農法を復活させ、緑の大地に変えたのがザワドコさんなのです。この技術を使って、300 万ヘクタール(東京ドーム 64 万個分)を緑化させることに成功しました。この功績が認められ、ザワドコさんは第二のノーベル賞として名高い Right Livelihood Award を受賞しました。

単純化していえば、「シロアリが農地をつくる」ということになるでしょう。日本では、家屋の木材を食べる「悪者」として知られるシロアリが、アフリカの砂漠化を防ぎ、乾燥地を緑化するすごい力を持っているのです。今、ブルキナファソで京都大学アジア・アフリカ地域研究科の大山修一先生(地理学)は、「ゴミを撒いてシロアリを呼び寄せて緑化を促す」という大胆な方法を試しています*。因みに、日本とブルキナファソは 1 万 3 千キロメートルも離れていますが、日本の食べているゴマは 99%が輸入品、その約 20%がブルキナファソ産なのです。

*2011 年 9 月 25 日 NHK スペシャル『クニ子おばばと不思議の森』で、日本最後の焼き畑として宮崎県椎葉村を取り上げていた。

*モリンガ *Moringa oleifera* Lam.は、ワサビノキ科の植物でその葉や根は食用だけでなく伝統的に薬用として使われている。右はブルキナファソで買ったモリンガ茶のパッケージ。

*大山修一[2015]『西アフリカ・サヘルの砂漠化に挑む ゴミ活用による緑化と飢餓克服、紛争予防』昭和堂



ザイ農法によってできた穴

<https://espacoecologicoar.com.br/>

